

中世肥後国府と菊池氏

小川 弘和

はじめに

鎌倉時代の菊池氏は平家与同勢力として一貫して幕府に抑圧され、それゆえ率先して倒幕に臨み南北朝内乱でも官方を支え続けたとされる^①。続く室町期の菊池氏は守護の立場を樹立するが、戦国期には動揺し豊後大友氏の介入で滅亡してしまう。かくして家伝文書を残さなかった菊池氏の研究は、史料制約に阻まれている。そしてそれは、その動向が敵方からも注視された南北朝期以降に比して、中世前半ではさらに厳しい。

かかる状況の克服を試みんと私は前に、府官系武士団として国府とも関わりつつ菊池川沿岸に勢力を展開したものの、一度は国府から離脱した菊池氏が、鳥羽院と縁を結んで国府との衝突を止揚・再進出し、肥後を基盤としようとした平頼盛とも結んでその地位を強化。かかる頼盛有縁勢力への配慮から、幕府による抑圧も最小限にとどめられて、その勢力を維持したという試論を提示したことがある〔小川二〇一五〕。

これを敷衍すれば、幕府は国府と地域社会の中心たる菊池氏に一定

の枠をはめつつも、それに依拠した肥後支配を構想していたという可能性も考えられる。だがそれを検証するには、肥後の中世的国府体制の形成・展開を明確にし、そのなかに菊池氏を位置づける必要がある。ところが国府についても史料的制約が厳しく、ともに工藤敬一による、国府周辺域の景観形成などの論〔工藤一九九八・二〇〇三〕、鎌倉期の荘園史料による遡及的な在庁官人復元の試み〔工藤一九八九〕がある程度だ。史料制約のぎりぎりまで迫ったその水準を越えることはもとより困難だが、これらの成果に、どれもそれ自体は既知の若干の事実・論点を重ねることで議論の幅をひろげ、所期の目標に近づければと考えるものである。

一 中世肥後国府の形成

1 飽田二本木国府の復興と受領制

中世の国府域は現・熊本駅近くの二本木で確定しているが、その前史には候補地として詫麻郡（地名「国府」と国分寺の存在・益城郡〔倭名類

聚抄」がある。それを踏まえて工藤は、詫麻国府が『日本三代実録』貞観十一年(八六九)七月十四日条にみえる、「官舎・民屋」を「顛倒」させた「大風雨」、「六郡」を「漂没」させた「潮水」で壊滅し、内陸の益城に移転。しかし中世国府域を構成する祇園社が承平四年(九三四)、藤崎宮が翌五年の創建と伝えることから、十世紀前半頃には鮎田二本木に移ると推定した「工藤一九九八・二〇〇三」。

だが近年、網田龍生は、従来詫麻国府の徴証とされた考古学的根拠が極めて薄弱で怪しむべきであること。地名「国府」の登場は近世からで、「国分寺」の「国分」から転じた可能性が高いこと。八世紀中葉から九世紀後半の間に存続する二本木遺跡の建物群は、十分に国府級のものともみなせること。国府と国分寺とが隣接する別郡に所在する例もあることから、詫麻国府の存在を否定。鮎田↓益城↓鮎田という変遷案を提示している「網田二〇一〇・二〇一八」。一方、工藤が国府壊滅の原因とした風雨・洪水を、保立道久は『日本三代実録』同年十二月十四日条所収の清和天皇告文中に「肥後国^東地震風水^乃災有^天。舍宅悉仆顛^利。人民多流亡^{利多}。」とあることなどを踏まえ、この地震が引き起こしたものと推定する「保立二〇一七」。

網田の論は説得力があり「潮水」による国府域壊滅も、より海に近い鮎田二本木の方が整合的だ。一方、地震と洪水との因果関係にはまだ検証が必要のようなが、少なくとも連続して継起したのは間違いなく、九世紀初頭の創建とみられる金峰山系中・百塚地区を中心とする池辺寺が九世紀後半に廃絶すること「網田二〇〇九・二〇一〇」も、地震による崩壊と国府周辺域施設の破棄と考えれば理解しやすい。

なお祇園社を創建したとされる国守・藤原保昌の任は事實は十一世紀初頭。藤崎宮創建も後世の伝で、その確実な初見はやはり十一世紀初頭である「工藤一九八四」。また、その創建は国府と関係する一方、十一世紀前半までの宇佐・弥勒寺教線の整備の一翼をなす「小川二〇一六^a」。当該期は全国的に受領制の形成期だが、九州でのそれは大宰府の域内支配強化との軋轢のなかで、大宰府の統制に服した筑・肥・宇佐宮・弥勒寺の基盤となった豊前・豊後と日向北部、摂関家領・島津荘が広範に展開していく南九州という地域差を生みつつ展開した「小川二〇〇七」。これらを踏まえると二本木国府の復興は、十世紀後半から十一世紀前半にかけての受領制成立に引きつけて捉えられよう。

ところで、受領制と相対した地域社会のあり方について従来は、「富豪」層の台頭・旧来の郡司層の没落といった社会変動が想定されていたが、近年はそれに疑問が提示されている「小原二〇一六」。ただし少なくとも肥後の場合には、鮎田・詫麻両郡の郡司で池辺寺創建にも深く関わったとみられる建部氏が九世紀後半を境に姿を消し「網田二〇一〇」、宇土半島基部を拠点に最大の勢力を誇った肥君一族も、後述するように鎌倉初頭には在庁兼益東郡司としてのみ現れ勢力を縮小している^②。

地震と洪水は国府の設備だけでなく、それを支える地域優勢者にも大きなダメージとなり、復興Ⅱ開発をととして外部勢力の参入も含む勢力交替が促されたのだろう。菊池氏の台頭もそのなかに位置づけられる。肥後の受領制と、それを原基とする中世国府の体制は、かかる新たに構築された空間と人員・地域社会のもとに築かれていったと推定されるのだ。

表1 詫磨西郷の所領構成

	①国内荘々名々坪付注文 (詫摩文書 277)	②神蔵荘田代荒熟・地頭名主等注進状 (詫摩文書 246)		
神蔵庄	国分 得永 寺 重富 三郎丸 岩永 <u>小枝吉</u> 得丸 平丸 清永 福永 松石 光吉 今牛 石松 金光 *飽田南郷にも金光名 (詫摩132) 弥石 石丸弥石 石丸 石丸内石能 石丸内石安 <u>枝吉</u> 千見 清松 春武 与安 弘納 国武	今富・国分 得永・光吉・今牛 千見・重富 清永名 ↑ ↑ 金光名 ↑ 春武名 国武名 清富名 庄家分領	70 余町 40 余町 60 丁 100 丁 15 丁 30 丁 5 丁 50 丁 30 丁	大和前司 (宇都宮氏カ) 沙汰 左女嶋四郎沙汰 跡次武者所渡云々 故津屋五郎季盛、今者其後家沙汰 堅志田八郎沙汰 * 清松は木原実澄仮名 (鎌 2719) 菊池入道沙汰 合志平原藤次沙汰 木原太郎姉沙汰 預所沙汰
	預所出雲左近将監重兼名田 80 丁 並木・永富・鳥栖 80 余丁：下司中原親能 * 惣公文川尻三郎源実明兼名田 51 丁 * 惣別当小国十郎安高兼名田 50 余丁			
	(詫磨) 新庄：716 町 5 段	合 570 余町内御家人領 400 丁 (名の合計とほぼ一致)		
	安弘名 久吉名 <u>枝吉名</u> (詫磨) 本庄：159 町 8 段			
八王子庄				
	38 町			

* 枝吉領 (田計 9 町 7 反・畠地漆嶋郷内土土呂木村)

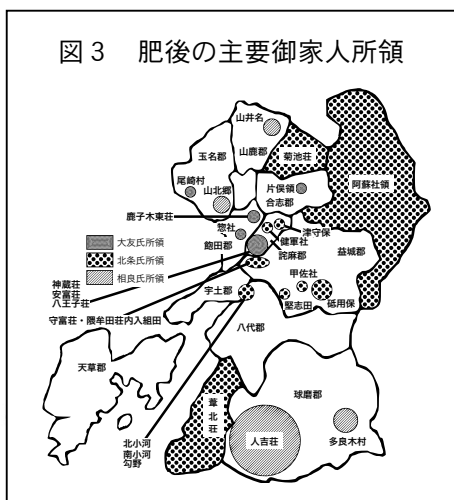
：建久 10 年、山本南庄下司宗形氏綱が川尻乙王丸 (橘宗頼) に売却 (詫摩 184・257)

二 鎌倉時代の肥後国府と菊池氏

1 鎌倉幕府と肥後在庁

平家討滅後の九州では戦後処理をとおして所領枠組の再編と東国御家人の権益配置が進められ、それは建久八年（一一九七）後半の諸国図田帳作成と国別守護制成立による平時体制移行でほぼ確定した。決定の明証は欠くものの、肥後守護は豊後・筑後とともに中原親能が兼任したことがほぼ確実で、その地位は猶子・大友能直が継承する。^⑨図3は、主要な東国御家人所領の分布を示したものだが、守護・大友氏が国府惣社をはじめ、在庁別名が散在分布する飽田・詫麻両郡をおさえて、幕府の肥後支配の軸を担う立場にあったことが明瞭だ。一方、遅れて国府体制に参入し独立性も高い菊池・阿蘇両氏（両氏のみが郡規模領主）は北条時政が統御して、守護・大友氏を補完している。これらの所領群の多くは後白河院政期に設定された平頼盛関係所領だが、以上から漏れる南・北両縁辺部では、八条院・頼盛との所縁から遠江御家人・相良氏が権益を得た。^⑩かかる構図のもと、在来の在庁たちはどうなっていたか。表1に立ち戻って検討しよう。

図3 肥後の主要御家人所領



まず主に②によって、数量的傾向を把握しておこう。惣田数五七〇丁のうち御家人領は四〇〇丁で、約七〇%を占める。①・②間には名の若

干の異同があるが、名の総数はひとまず①によって二十八とし、②の御家人名数十二を引くと、非御家人領の名数は十六。これで田数一七〇丁を割ると、非御家人名の平均規模は一〇丁余となる。御家人名の規模は一〇〇〜五丁とバラつきが大きいが預所沙汰・庄家領を除いて平均すると三二丁程で、非御家人領に卓越する。そして御家人名保有者八名のうち「次武者所」は不明だが、肥後国内に名字の地を求められ在庁官人と判断できるものは五名、東国御家人は二名となる。

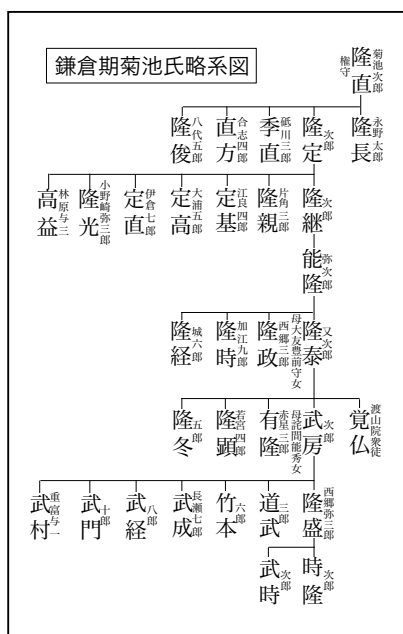
内訌不明の非御家人名がすべて在庁別名であるかは不明だが、平均一〇丁という規模は領主名ではある。詫磨氏が神主職を掌握した神蔵莊鎮守・十禪師宮は、立莊前の詫麻西郷鎮守の系譜を引くと思われるが、その御祭供田は莊内に散在設定されており、弘長三年（一二六三）の時点では浮免となつていた。^①よつて名々そのものが、かかる国郡寺社等免田に宛てられた可能性も高くはない。また肥後では阿蘇大宮司家を除けば、在庁官人たり得るような有力非御家人武士も確認できない。その数は十六で御家人名数を上回るが、相対的に規模も小さく、御家人に編成されることも所領没収されることもなかった雑色・職人等の給名が大半を占めたとみておきたい。

これに對して主要な在庁別名は御家人領の部分でほぼ尽くされており、その領有者は国御家人に編成されるか処断・没落かで運命を分けたことになる。その処断比率は不明一を在庁とすれば二五%・東国御家人とすれば三八%で決して少なくはないが過半には満たない。在庁の構成と地域社会は一定の変動を被つたものの、守護・大友氏をはじめ東国御家人が日常的に国務に關与できるわけでもない。幕府と結

んで生き残った在庁層による国府現地地の掌握は、没落者の排除でむしろ強まったとすらいえる。やはり幕府の肥後支配は、彼らに一定の枠をはめつつも、その現地掌握に依存するものだったと考えられよう。

ところで、在庁別名は周辺諸郡・諸郷にも跨がって分布したと推定されるので、②中の規模で個々の在庁の勢力を論じることができない。だが、やはり菊池氏はその中枢にいたと思われる。『続群書類従』系図部所収菊池系図の一本によれば、菊池氏は二代にわたって大友・詫磨氏から妻女を迎えている。

このうち隆泰の母については大友系図(『続群書類従』系図部)の一本が能直の女子の一人を「菊池能隆妻」とすることと符合する。大友系図は詫磨氏を能秀までしか記さないため、隆泰妻は武房母との対照はできないが、文永四年(一二六七)に訴人・詫磨時秀からの「亡父能秀書置状」を、関東御教書をもって送付されている論人・「菊池二郎母」⁽¹³⁾は、まさにこの女子にあたる。一方で能直の女子には北条義時の男・名越朝時の妻となり時章らを産んだ人物もみえる。肥後守護家・大友氏を媒介に、得宗家と菊池氏とが姻戚関係の環をなし、さらに菊池氏歴代の当主には、二重に大友の血が入っているのだ。かかる例は豊後・筑後・



肥後三国をとおして、菊池氏の他に見出せない。これは鎌倉期にも菊池氏が筆頭在庁の地位を保っており、幕府の肥後支配の要に位置づけられていたことの証左だろう。

2 承久の乱と菊池氏

南北朝内乱後半の南朝年号・弘和四年(一二八四)七月の菊池武朝申状(『菊池古文書』『南北朝遺文』九州編第五八二六号)は「囊祖肥後守隆直不與東夷之逆謀、奉守劍璽、爰安徳天皇之勅命、数年励忠勇、嫡子隆長・三男秀直以下数輩、致命畢」と治承・寿永内乱時の安徳天皇への忠節・反幕府行動を述べ、続けて承久の乱時の事情を「順徳院御宇承久合戦之時、先祖能隆為大番役、依進置叔父兩人、随院宣進戦畢、就之当家本領数ヶ所為平義時被没倒畢」と記す。鎌倉時代の一次史料が僅少・断片的ななかで、かかる記述が度重なる幕府からの抑圧に怨みを募らせた菊池氏が、率先して倒幕に臨み「勤王」に励んだというイメージの形成に大きく寄与してきた。だがこれは宇土に逼塞する征西府中で生じた軋轢のなかで、自家の忠節を歴史的に強調した文脈に位置づくるものだ。本稿で検討したように幕初の実情が通念と異なる以上、承久の乱の顛末にも再検討が必要だろう。次に掲げるのは、それに関わる史料断簡である。

天台延暦寺日吉八王庄十八丁三反内 大山房
平与九三三反

地頭菊池九郎人道定阿

同 無動寺領池辺寺三丁

地頭原田孫二郎 菊池七郎跡

健軍宮行宮 十二丁九反四丈

地頭信濃民部入道跡

同宮本不輸鹿子木庄内十四丁八反四丈内□庄二丁

地頭同人 本領主多之

鎌倉殿御領三十五丁六反内

「勸修寺文書」から杉本尚雄編『肥後国^{鹿子木} 莊史料』(九州史料叢書三)

に「鹿子木庄等田数領主目録」と題して収められた本文書には、論拠不明ながら編者による「建長三年断簡」という頭注が付されている。

『鎌倉遺文』もこれに従い「肥後鹿子木莊地頭目録」と題して建長三年末尾に、第七三九九号文書として収めた。一方、工藤敬一は「地頭信濃民部入道跡」に二階堂行盛が建長五年(一二五三)十二月九日没(「吾妻鏡」同日条であることから、杉本の判断を「ほぼそのあたりのところ」と評している「工藤一九八九」)。かくして上限は建久五年末頃となるが、下限についてはどうか。工藤も指摘するように列挙される所領は飽田郡に属し、鹿子木莊の領主・地頭目録とするのは適切ではない。様式は図田帳断簡に近いが九州の図田帳の田数は指数的であるのが普通だから、その基礎データとなるような郡・郷単位の検注帳簿とみるのが適当だろう。

建長五年以降の全国的な田文作成命令の徴証は、どれも異国合戦に関わる文永九年(一二七二)・建治二年(一二七六)・弘安八年(一二八五)とされる「清水二〇〇七」。ここで手掛かりとなるのが「菊池七郎跡」の「無

動寺領池辺寺」を宛て行われている「原田孫二郎」で、川添昭二は筑前の有力府官・大蔵系原田氏一族で、弘安八年九月付豊後国田文注進状案(「平林本」鎌一五七〇〇)に玖珠郡栗木名の領主としてみえる「筑前国御家人原田七郎種秀」も同族だろうとする「川添一九七九」⁽¹⁴⁾。首肯されるが、豊後田文には原田種秀と同じく所領を得ている九州内の他国御家人が散見する。そのうち大分郡阿南荘内光一松名は「肥後国御家人菊池三郎武弘」のものとなっているが、同地は「菊池三郎二郎房高」が「蒙古勲功之賞」として拝領したとされる⁽¹⁵⁾。武弘・房高は親子と思われるが、ここからこの種の所領の多くは、同じく異国合戦勲功賞として宛て行われたものと推定できる。池辺寺の原田孫二郎も同様だろう。するとこの断簡も弘安八年前後のものではないか。

作成時期と性格をこのように捉えたうえで、内容の検討に移ろう。先程来触れている「菊池七郎跡」の池辺寺は、幕初・承久の他に没収の契機を考えたいが、幕初であれば直ちに東国御家人に配分されただろう。また「菊池七郎」は系図上では能隆の叔父「伊倉七郎定直」に比定できるから、まさに菊池武朝申状の「能隆が大番役のために上洛させていた叔父二名が京方となって所領を没収された」という記述と符合する。幕府はかかる承久没収所領などがある程度プールしており、それを異国合戦恩賞に充てたとみられよう。⁽¹⁶⁾

この池辺寺は、壮麗な百塚遺構によって「謎の古代寺院」としてばかり注目されるが、前述の九世紀後半の廃絶後暫くして、同じく金峰山系中の別地に中枢を移して再興され「網田二〇〇九・二〇一〇」、平安末には比叡山無動寺の末寺として、金峰山系の修験信仰を統括していた

ようだ〔阿蘇品一九九六〕。その地位は金峰山系にとどまらぬ、吾平山相良寺・飯田山常楽寺・阿蘇山西巖殿寺などからなる肥後の天台・修験ネットワークの中核であったと推定される⁽¹⁷⁾。また、池辺寺・国府双方から近い坪井川河口域・上高橋高田遺跡は青磁・白磁破片や滑石製石鍋・宋銭などを出土しており、中世肥後国府直近の港湾と評価されている。かかる陶磁器類は池辺寺関連遺跡からも出土し、上高橋高田遺跡出土の呪符木簡は金峰山系の修験者、特にその中核たる池辺寺による港湾・交易統括を推定させるものだ〔網田一九九二・二〇一〇〕。国府と深く関わる中核的寺院として、そのプレゼンスは中世にこそ上昇したと評価せねばならない。

かかる池辺寺を鎌倉期にも菊池氏が掌握していたことは、その筆頭在庁としての地位の証左だろう⁽¹⁸⁾。だがそれは定直の京方与同で没収されて、幕府の管理下となった。一方、建長五年(一二五三)までには肥後守護職が大友氏から名越時章に移る⁽¹⁹⁾。なお相互に姻戚とはいえ、守護・大友氏と鎌倉の得宗家・現地の菊池氏の連携という当初の支配構想は軌道修正された。そして異国合戦期には得宗権力に接近した河尻氏が、「押領使」として国内御家人の統率にあたるようになっていた(表2)。

ただし、「菊池九郎人道定阿」(系譜上の位置は不明)が八王子荘地頭の地位を保っているように、その所領没収は一部にとどまっている。また定直の池辺寺権益は庶子への分割相続の結果であろう。つまり菊池氏総体としては地位の後退であっても、嫡流家が国府での立場・権益を完全に失ったとは考えにくい。また文永十年(一二七三)に菊池武房

が、異国警固のために動けない自身にかえて知人・出田泰経を、北条政村の病氣見舞に派遣しようとしているように⁽²⁰⁾、幕府中枢との関係も必ずしも険悪なものに陥ってはいない。加えて、降つて嘉暦二年(一二八二)三月九日の鎮西下知状二通(「深江文書」鎌三〇一七八・九)では、ときの肥後守護・規矩高政に守護使派遣を命じつつ、両使の一方を名指して菊池武時と決めている。これも北条一門との繋がりが、その立場の証左となる。このように承久の乱以降もなお、菊池氏は幕府中枢との関係のもとに拠点地域と一定の勢力とを保ったのだ。

三 菊池氏の一族結合

ここまで、肥後国府のなかの菊池氏について論じてきたが、最後にその範囲をある程度確定しておきたい。史料の僅少さから従来はどうしても、断片的に窺える「菊池」姓の者をひろく菊池氏とみなして考察する傾向にあった。だが一族の結合様態・家々の分立の様相の捉え方が不正確だと理解を誤ることは、たとえば相良氏で例証済みだ〔小川二〇一八〕。

菊池氏に展開する府官・藤原一族からは、早く筑前の山鹿・粥田両氏が分岐して、平安末には肥後の一族とは疎遠になっていた〔小川二〇一五〕。また前掲「平安期菊池一族略系図」のように、平安末頃までには肥後の一族からも、合志・天草、球磨郡の岡本・永里などひろく肥後全域に一族が展開しており、国府進出・筆頭在庁化にともなう勢力の拡大展開が推定される。

だが阿蘇品保夫も検討している〔阿蘇品二〇〇七〕ように、治承四年(二

一八〇後半頃の菊池隆直の反平家蜂起に動員された一族は、隆直の息・「長野太郎」隆長、院政期初頭に分岐した合志氏か隆直の息・合志四郎直方に関わるか決め手を欠く「合志太郎」、系図上は早く摂関期に分岐しているが菊池郡内の地を名字とする「山崎六郎」「同四郎」、そして不明の「野中次郎」である（『吾妻鏡』治承五年二月二十九日条）。それはおおむね隆直の近親と菊池郡内・近隣の一族に収まるから、すでに各地の一族の大半は独立の家々として分岐を遂げていたと考えられる。鎌倉菊池氏は、かかる範囲ではじまったとみるべきだろう。

次に、その展開をみてみよう。ここでも導きとなるのは阿蘇品の作業だ。阿蘇品は、蒙古襲来絵詞に描かれる弘安合戦時の生の松原での菊池軍団が、六つの集団からなることに着目する。うち最大の集団には嫡流家当主・「次郎武房卅七」その人と、「三郎日高年卅」が属している。後者はその年齢と仮名から武房のすぐ下の弟・赤星三郎有隆に比定される。ここから阿蘇品は、他の五つの軍団の将を武房の弟や子息とみることができず、叔父やその子息であろうと判断し、菊池氏の惣領制は叔父の家々を統率範囲とするものと結論している（『阿蘇品』二〇〇七）。

かかる阿蘇品の論は、承久の乱後も保たれた菊池軍団の規模を示すものでもある。ただし惣領制が、乱後の一二二〇年代に御家人の族的結合のあり方を前提に、幕府御家人役の賦課制度として確立すること（田中二〇一）²¹。よって建長二年（一二五〇）の造閑院殿配分帳簿（『吾妻鏡』建長二年三月一日条）に「菊池入道跡」として現れるその範囲は、乱時の能隆から次の隆泰にかかる頃に、能隆が叔父二名を大番役に派遣し

ていたようなあり方を踏まえて固定するのであることを踏まえると、その範囲は武房の叔父家に限定されぬ、もう少しの幅をもったかもしれない。²²

一方、その範囲を一二二〇年代に完全に固定して変動がなかったものとみることも危険だ。表2は宮崎宮神宝記紙背文書として残る、建治二年（一二七六）の高麗侵攻計画での動員史料群を整理したものだ。動員にあたる肥後国押領使・河尻兵衛尉に申状を提出している者たちは、それぞれの家の惣領と判断できるが、¹⁵は菊池武房の叔父・九郎隆時にほかならない。彼は弘安合戦では嫡流・武房の指揮に服したと思われるが、かかる独立傾向も明らかに示す。史料制約から具体化は困難だが、菊池氏においても結合様態・範囲の動態的变化を考えねばなるまい。

また阿蘇品は、南北朝内乱時の菊池一族の様態を一族一揆として捉えているが、これも首肯されよう。人吉荘域の相良一門では、内乱当初は分立する家々に対する惣領制にもとづく軍事動員がみられたが、内乱の激化はそれを実態にそぐわぬものとし、戦闘集団のあり方は地縁・血縁の混交した一揆へと移行した（小川二〇一八）。菊池氏にも同種の事情が想定されよう。内乱下の社会的結合と軍事動員体制は、惣領制の延長・変容とは別レイヤーの新たな局面に移行したとみるべきだろう。

表2 宮崎宮神宝記紙背文書の肥後勢

No	年月日	差出者	内容・備考	鎌遺No
①	3.11	持蓮	仏道房 (守護代使) が鎌倉に上る際に持参済	12262
②	建治 2.3.30	窪田庄預所僧定倫	10 日に「押領使河□□衛尉」に報告済	12271
③	〃	〃	員数・装備等の再注進	12275
④	3.30	寺原後家尼	先日「河尻兵衛殿」に報告済	12277
⑤		千原兵藤太入道沙弥新仏	包紙のみ	12278
⑥		沙弥西念 (鹿子木小川殿代官)	〃	12279
⑦		藤原秀村 (ミのへとの)	〃	12280
⑧		□□□のしき□□□	〃	12281
⑨		「大屋野」藤原保□	〃	12282
⑩		甘 (味) 木庄南三味式部房	〃	12283
⑪	建治 2. 閏 3.1	久米預所兵衛志藤原重□	3 月 17 日の参上時に報告済	12287
⑫	閏 3.1	左衛門尉頼房	子息の参上時に報告済	12288
⑬	建治 2. 閏 3.2	僧□□	3 月 4 日参上時「河尻兵衛□」に提出済	12289
⑭	後 3.2	左兵衛尉貞□	去月 17 日に既に人数注進	12290
⑮	閏 3.2	沙弥導空 (菊池九郎入道＝加惠隆時)	去月 27 日に代官が注進済	12291
⑯	閏 3.3	北山室地頭尼真阿	子息三郎光重・賀久保二郎公保が参上・注進	12292
⑰	建治 2. 閏 3.7	沙弥西向 (井芹弥二郎藤原秀重)	所領・員数などの詳細な注進	12297
⑱	閏 3.8	左衛門尉菅野兼保 (千田重富地頭)	10 日頃に千田本庄地頭を通して注進	12298

おわりに

肥後の受領制は九世紀後半の地震・洪水による国府域壊滅のうえに形成された。そこでは地域優勢者の変動・交替をともないつつ、飽田国府周辺諸郡を中心に在庁官人制が編成されていく。一方、北部では府官系一族の菊池氏が菊池・合志両郡を起点に菊池川に即して下流域にまで勢力を伸長するが、その過程で国府から離脱し、院政期に入ると国府と激しく衝突するようになる。かかる事態は大宰府・肥後国府を掌握する一方、菊池氏とも所縁を結んだ鳥羽院権力によって止揚され、菊池氏は国府に再進出して筆頭在庁となっていく。また同時期には阿蘇社も鳥羽院権力を背景に一宮としての地位と社領を確立した。かかる鳥羽院政期は肥後国府の中世的体制の確立期と評価できる。

後白河院政期に菊池氏は、肥後を基盤に定めた平頼盛と結んでさらに勢力を伸長するが、平家滅亡・幕府の九州進出は、主要な平家与同武士団たる菊池氏の権益削減に結果した。だが幕府の頼盛所縁の勢力への配慮と、守護・大友氏のもと菊池氏を軸に肥後を掌握しようという構想によって、本領・菊池荘や国府の枢要寺院・池辺寺など、その主要権益は温存された。大友氏との二代にわたる姻戚関係にみられるように、かかる幕府体制下の菊池氏は厚遇されていたとみなせよう。

しかし承久の乱時の庶子の京方与同によって池辺寺は没収された。また守護職の大友氏から名越氏への交替により、幕初の支配構想とそのなかでの菊池氏の立場も軌道修正されていく。その結果異国合戦期の肥後国府では、得宗家に接近した河尻氏が存在感を高めることになった。だがそのなかでも菊池氏は幕府中枢との関係もある程度保ちつ

つ、本拠一帯とその勢力を維持していた。その異国合戦での活躍は、かかる立場と勢力とを前提にせねば説明できず、菊池氏が幕府に繰り返し抑圧され怨みを募らせたという「勤王」史観の温床でもある理解は成り立たない。幕府からの離反の要因も、異国合戦以降の東国御家人の下向・定着にともなう地域構造の変動などの、同時代的状況のなかで解く必要がある。

ところで、菊池氏は院政期末までに肥後各地に一族を分出したが、その大半は家として独立し、鎌倉菊池氏は菊池荘域近隣の近親・同族を統率の範囲としてはじまった。その惣領制による統率範囲は、鎌倉初頭の状況よりやや狭まるかたちで一二三〇年代に確定すると思われるが、その後にも多少の動態的変化が想定される。僅少・断片的な史料から各人の系譜上の位置を特定するのは困難だが、鎌倉菊池氏を論じる際にはかかる事情に留意する必要がある。また、南北朝期の菊池一族の結合は戦時に即応して形成された一揆であり、鎌倉的惣領制とは断絶したものだ。

以上が本稿の概要だが、予測されたこととはいえ先行研究の吟味・再構成に終始し、新たな実証は殆どつけ加え得なかった。だが、中世国府のなかに菊池氏を位置づけ、幕府が菊池氏を重用した肥後支配を構想していたことを示すという、所期の目的は一応達成できたのではない。ただしこれを補強するには、なお国府の体制について検討を深める必要がある。論旨展開上、本稿では十分には扱えなかったが、たとえば国守・国主との関係や、阿蘇社と池辺寺については、まだ考察の余地が残っている。後日を期したい。

(1) たとえば管見の限り鎌倉菊池氏に触れた最新の研究である「崎山二〇〇五」でも、かかる伝統的見解が踏襲されている。

(2) ただし康治二年(一一四三)に国府関係者として「建部成末」がみえ(年欠肥後国司解写「高野山文書又続宝簡集」百二「平安遺文」第四百一九号)、滅亡したわけではないようだ。

(3) 『続群書類従』系図部は比較的詳細で若干の異同のある系図二本と簡略な系図一本を載せる。また幕末の肥後藩士・八木田政名編『新撰事蹟通考』は諸史料による考証を経た系図を載せる。いずれもその祖を大宰権帥・藤原隆家に求めるが、事実は「志方一九五九」が解明したように隆家の郎等ともなった府官であり、京下りの武人と菊池郡の在来勢力との結合による家系と推定される。よって撰関期の系譜には信が置きたく、「平安期菊池一族略系図」は志方の考証に拠りつつ諸本の異同は適宜判断して作成した。以降についても一次史料との逐一の対照による史料批判は困難だが、対照可能な部分に顕著な矛盾はない。また大幅な家系交替による改竄の必要や、近世における家譜創造は想定されない。よって鎌倉期の部分はおおむね信頼できるとみなし、後掲「鎌倉期菊池氏略系図」を作成した。なお最近、志方の考証をさらに深めようと試み、大武・藤原佐忠に菊池氏の系譜を求めた「西村二〇一八」を得た。その史料博搜には敬服するが、推論の前提となる当該期の制度・社会理解には現行の水準と乖離した難がある。平惟仲との姻戚関係なども含め、その主張はなお一つの可能性に止まる。

(4) 建久六年三月日甲佐社領立券文案(「阿蘇文書」『鎌倉遺文』第七七七号以下「鎌七七七」の如く表記)、仁治二年六月日肥後国留守所下文(「寿福寺文書」鎌五九〇四)。なお「詫摩文書」の二通は『鎌倉遺文』未収録のため『熊本県史料』中世編第五による。②によつて名の領有者が判明するのは御家人領に限られるが、その合計田数は四〇〇丁と、惣田数五七〇丁の大半を占めており、他の名は狭小とみられること。また検出で

きる在庁は当然に神蔵荘内に名・所職を有した者に限られるが、その分布には一定のひろがりがあることから、大勢は示すと考えられる。なお表1のうち他史料で在庁と確認できるのは菊池・河尻両氏である。

- (5) 天養元年(一一四四)前後に木原広実・秀実父子は、国府と衝突する武力紛争を幾度か起こしている「工藤一九七七」が、②にはその後裔である「木原太郎」がみえる。かかる肥後中央部での紛争も鳥羽院政期後半頃に一定の調停がなされて、菊池氏も含む在庁・別名体制が一応完成したのではないか。またこの頃には、在庁体制の射程外である南部の球磨郡でも、八代と日向北部に跨がる勢力との地域紛争の鎮圧と事後処理をとおして、国府に連なる郡司級領主・須恵氏およびそれと連携する平河氏を軸とする地域秩序が形成されていき、それが平頼盛による球磨御領立荘の歴史的前提となった「小川二〇一六a」。

- (6) 宇土郡の郡浦社の末社化は、鎌倉後期の得宗による海上交通掌握策によるとする「日隈二〇〇七」が妥当である。

- (7) 阿蘇社は国府から遠方ゆえに在庁官人結集の場とはなり得ず、ゆえに実質的な一宮はむしろ藤崎宮であったという見解もある「工藤一九八五」。しかし「井上二〇〇九」によれば一宮の本質は「国鎮守」たることにあり、国府遠方の事例は過半に上る。在庁官人結集の場という性質は派生的・副次的とみなせよう。なお阿蘇社の詳細は課題から外れるので別の機会を期し、ここでは二点だけ指摘しておく。一つは、永承四年(一一四九)の「肥後国阿蘇社焼亡」(『百鍊抄』同年三月十九日条)という事実だ。降つて康和二年(一一九九)五月二十一日には朝廷で阿蘇社の「御正体」を議定している(『中右記』同日条)が、祭神の確定は社殿造営の前提でもある。その再建はこの時期までずれ込み、その過程で財源のあり方も朝廷・国府・阿蘇社間で問題になったことが、社領の成立に繋がった可能性がある。もう一つは、権門領荘園としての初見であり、工藤が安楽寿院領たることの根拠とした、保延三年(一一三七)から康治二

- 年(一一四三)の六年分を一括した年貢結解状(『大日本古文書』「阿蘇家文書」第二号)についてだ。管見の限り注目されていないが、平清盛は保延三年正月から永治元年(一一四一)末頃までの間、肥後守であった(『公卿補任』など)。その立荘と結解作成に関与した可能性は極めて高からう。後に北条時政に継承される権益も、ここに由来するかもしれない。ところで「杉本一九五九」では、清盛より前の歴代受領が村上源氏や高階氏ら院近臣に占められていたこと。阿蘇荘の領家職が村上源氏に相伝されることから、その成立への関与を指摘する。かかる肥後国府への院権力の浸透は、一方で菊池氏の立場にも作用しただろう。より具体的に分析を深める必要があるが、本稿では果たせなかった。課題としたい。

- (8) 鳥羽院政期は播磨でも、在庁別名体制と国内寺社体制の樹立を両輪とする、中世的国府体制の確立期だった。後白河院政期の諸荘園立荘は、これを歴史的前提としつつも、それを一定程度変容させて展開する「小川二〇一七b」。その経緯は肥後と通底しており、かかる観点からのより広範な検討が必要だろう。

- (9) 「小川二〇一七a」の注(14)で考証した。「伊藤二〇一〇」は大友氏の筑後・肥後守護在任を強く疑うが、天野遠景から継承された両国の所領分布は有力な傍証と考える。肥後では後述する大友・菊池両氏の二重の姻戚関係も無視できない。

- (10) 図3は大友氏所領は「工藤一九八九」、阿蘇社領は「工藤二〇〇六」、宇土郡・八代郡は「日隈二〇〇七」、葦北郡は小川弘和「篠原系図と田浦系図―改変系図写の史料批判と活用の試み―」(第八回中世地下文書研究会、二〇一八年六月三日・立教大学。企画進行中のある記念論集に「葦北七浦衆と葦北荘」として二〇二〇年に掲載予定)、他は「小川二〇一五」による。

- (11) 弘長三年五月十日詫磨時秀配分状案(「詫摩文書」鎌八九五七)。

(12) たとえば、建久十年(一一九九)に山本南莊下司・宗形氏綱が神蔵莊内枝吉名の橘宗頼への売却を余儀なくされ、また長瀬遠貞が鹿子木莊内長浦村を菊池永富に寄進し、さらに建永元年(一二〇六)に大友能直を主と頼んで譲進したものの、後に大友氏との紛争で没落するなどの例がある〔工藤一九八九〕。

(13) 文永四年十一月廿三日関東御教書〔詫摩文書〕鎌九八〇六。

(14) ただし川添は肥後国御家人と誤認している。図田帳〔内閣文庫所蔵〕鎌一五七〇二の方では「肥前国御家人」と記されるので錯誤したものか。なお二系統の豊後田文の關係については「小川二〇一七a」参照。後述の菊池武弘は注進状案では欠損部分で図田帳による。

(15) 正慶元年正月十一日賀来社年中行事次第〔柞原八幡宮文書〕鎌三一六六〇。

(16) 「小川二〇一八」では人吉莊の相良佐牟田家を素材に、鎌倉後期の単独相続への移行後にも庶子が所領を得て独自の家を立てることが可能であったことを指摘した。かかる異国合戦恩賞こそ、その契機だったのではないか。もちろん豊後の田文にみえるように、それらの規模は大きくはない。だが異国合戦の恩賞不足への不満を倒幕に向かう原因の一つとみる通念には相対化が必要ではないか。そもそも異国合戦終了後も、幕府は約五〇年存続しているのだ。

(17) 寛元二年(一二四四)成立で信頼性のある『泉涌寺不可棄法師伝』(『統群書類従』伝部)によれば、仁安元年(一一六六)所生の月輪大師俊苒は嘉応四年(一一六九)に伯父の池辺寺別当・珍暁に預けられ、承安四年(一一七四)に母の居す平等院領・味木莊に帰る。預所・源憑が莊内にて飯田山常樂寺諸僧を呼び大般若經転読を催した際、才能を発揮した俊苒を養子にし、安元元年(一一七五)には吾平山学頭禪坊に預けられた。治承三年(一一七九)には飯田山常樂寺の学頭真俊法師につき、寿永三年(一一八四)太宰府觀世音寺で具足戒を受ける。そして後に建久

五年(一一九四)簡嶽に正法寺を開いたという。かかる俊苒の足跡は、正法寺は彼の開いた真言宗泉涌寺派だが、他は平安末の肥後の天台ネットワークに即したものだ。なお工藤敬一は「摂洲渡辺人」とされる源憑を渡辺党の一員とみ、味木莊に付属する税所公文・国侍所司職が後に大友一族のものとなっていることから、彼は国府官人でもあったのではないかと推定している〔工藤一九九八〕。彼が渡辺党貞流の家系の相撲人であることは、新出系図を駆使した「生駒二〇一一」で確定された。生駒は京都周辺から消えるこの家系を衰退したとみるが、工藤のいうように肥後に活路を見出した可能性はある。承安頃には摂関家・肥後国府ともに平家の影響が及んでいるから、その来住は平家との所縁によった可能性もあろう。だとすると「小川二〇一七b」で播磨・伊予において指摘した、外来者の在庁化の例となる。その場合肥後では、後白河院政期にも在庁構成の若干の再編があったことになる。ただし鎌倉期以降にその後裔の徴証はなく、税所公文・国侍所司職を源憑が有したと断じることとできない。彼が肥後の天台ネットワークや国府に接点をもっていたことは間違いないだろうが、官人・在庁とするには決め手に欠ける。また『泉涌寺不可棄法師伝』には正法寺の「大檀那当国在庁秦小大夫」も登場するがその拠点は不明だ。

(18) 菊池氏と寺社との關係については、平安期の太宰府安樂寺と連携した展開や、南北朝期の武重と曹洞宗僧・大智との關係が着目されてきた。だが当該期には、天台修験の中核・比叡山無動寺の末寺所領として、肥後の天台修験ネットワークの中心となる池辺寺をおさえていたこと。それにより水上交通・交易にも関与したと思われることは、注目されてよい。

(19) 建長五年九月五日名越時章施行状〔詫摩文書〕鎌七六一五。なお「伊藤二〇一〇」は時章は筑後ともども父・朝時の代行で、朝時の在任は一三二〇年代後半まで遡るとみる。

(20) 文永十年後五月廿九日菊池武房書状〔蓬左文庫所蔵金沢文庫本齊民要術

第十裏文書」鎌一一三三二)。なお、出田氏が早く菊池氏から分岐した同族であっても武房の統制下でない独立の家であったことは「阿蘇品二〇〇七」参照。

(21) 阿蘇品が、六という集団数が『新撰事蹟通考』所収菊池系図での武房と叔父五名という数と一致する点とは、系図諸本で異同があるので決め手とはなるまい。

引用文献

- 阿蘇品保夫 一九九六年「肥後金峰山系の修験と池辺寺」『池辺寺跡Ⅰ(百塚C地点・堂床遺跡発掘調査報告書)』熊本市教育委員会
- 阿蘇品保夫 一九九九年「阿蘇社と大宮司 中世の阿蘇」一の宮町
- 阿蘇品保夫 二〇〇七年「改訂新版菊池一族」新人物往来社
- 網田龍生 一九九二年「上高橋高田遺跡 第一次調査区発掘調査概報Ⅰ」熊本市教育委員会
- 網田龍生 二〇〇九年「池辺寺跡 肥後山中に眠る伝説の古代寺院」同成社
- 網田龍生 二〇一〇年「池辺寺跡と二本木遺跡群」『先史学・考古学論究』V龍田考古学会
- 網田龍生 二〇一八年「肥後の国府と鞠智城」近年の発掘調査成果から見た古代肥後国府の推定地」古代山城に関する研究会『古代の肥後と鞠智城—菊池一族の夜明けを紐解く、もう1つのエピソード—』発表資料集、熊本県教育委員会・菊池市教育委員会
- 生駒孝臣 二〇一一年「平安末・鎌倉初期における畿内武士の成立と展開—摂津渡辺党の成立過程から—」同「中世の畿内武士団と公武政権」戎光祥出版、二〇一四年に再録
- 伊藤邦彦 二〇一〇年「鎌倉幕府守護の基礎的研究【国別考証編】」岩田書院
- 井上寛司 二〇〇九年「日本中世国家と諸国一宮制」岩田書院

小川弘和 二〇〇七年「撰関家領島津荘と〈辺境〉支配」同「中世的九州の形成」高志書院、二〇一六年に再録

小川弘和 二〇一五年「府官系武士団の展開と肥後国」前掲『中世的九州の形成』に再録

小川弘和 二〇一六年a「平安時代の球磨郡と造寺・造仏」前掲『中世的九州の形成』

小川弘和 二〇一六年b「大野別符の成立と展開」前掲『中世的九州の形成』

小川弘和 二〇一七年a「豊後の「図田帳」と所領体制」『九州史学』一七七

小川弘和 二〇一七年b「院政期播磨の受領と国衙領」『熊本史学』九八

小川弘和 二〇一八年「鎮西相良氏の惣領制と一揆」『歴史』一三〇

川添昭二 一九七九年「菊池氏の大宰府戦略」『新・熊本の歴史』3中世、熊本日日新聞社

工藤敬一 一九七七年「鳥羽院政期肥後の在地情勢—肥後国訴状写の分析—」同『莊園公領制の成立と内乱』思文閣出版、一九九二年に再録

工藤敬一 一九八四年「藤崎八幡宮と宮内荘」前掲『莊園公領制の成立と内乱』に再録

工藤敬一 一九八五年「肥後北部の莊園公領制—山鹿荘と二つの玉名荘—」前掲『莊園公領制の成立と内乱』に再録

工藤敬一 一九八九年「肥後中央部の莊園公領制おぼえがき」前掲『莊園公領制の成立と内乱』に再録

工藤敬一 一九九八年「平安後期の地方政治」『新熊本市史』通史編第二卷中世

工藤敬一 二〇〇三年「肥後国府論—鮑田国府を中心に—」『先人の暮らしと世界観』熊本歴史叢書2古代下、熊本日日新聞社

工藤敬一 二〇〇六年「平安・鎌倉期の阿蘇文書」熊本県立美術館特別展図録『阿蘇家文書修復完成記念 阿蘇の文化遺産』

小原嘉記 二〇一六年「平安後期の官物と収取機構—莊園制前史としての撰関期—」『日本史研究』六四一

- 崎山勝弘 二〇〇五年「征西府の肥後国支配―菊池氏と阿蘇氏との関わりをめぐって―」今江廣道編『中世の史料と制度』続群書類従完成会
 志方正和 一九五九年「菊池氏の起源について」同『九州古代中世史論集』志方正和遺稿集刊行会、一九六七年に再録
 清水 亮 二〇〇七年「鎌倉幕府御家人役賦課制度の展開と『関東御領』」同『鎌倉幕府御家人制の政治史的研究』原型初出二〇〇二年
 杉本尚雄 一九五九年「中世の神社と社領―阿蘇社の研究―」吉川弘文館
 田中大喜 二〇一一年『中世武士団構造の研究』校倉書房
 西村和正 二〇一八年「『菊池氏始祖』藤原藏規の出自についての一考察」『熊本史学』九九
 日隈正守 二〇〇七年「平安末の内乱と鎌倉幕府支配の浸透」『新宇土市史』通史編第二卷中世・近世
 保立道久 二〇一七年「応天門の変と九世紀肥後地震」熊本被災史料レスキューネットワーク主催「学んで守ろう熊本の歴史遺産」第3回「熊本の歴史地震に学ぶ」講演資料